

公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2017年度 助成者)

作成日 2017年11月3日

氏名 (フリガナ)	濱田 有希 (ハマダ ユキ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2017年10月8日(日)～10月14日(土)
所属機関名 身 分	名古屋記念財団平針記念クリニック 看護師

今回、私は職場の海外研修の一環でこちらの研修に参加させていただきました。以前は循環器内科・糖尿病内分内分泌内科の病棟で勤務をしていましたが、現在は透析病院で勤務をしています。元々学生の頃から海外への興味はあり1ヶ月間短期留学へ行ったこともありましたが、実際の医療現場を見たり、医療制度を学んだりする機会はなかったので、非常に良い経験になりました。

アメリカの看護師は、日本の看護師に比べると実施できる医療行為が多いというのは聞いたことがありましたが、看護大学の教育プログラムについてレクチャーを聞いたり、施設見学をしてみて、学生のうちから看護技術の演習だけでなく、急変時対応のようなシミュレーション演習を行っており、患者に何が起きているのか、どういう状況なのかを自分で考え、様々な情報を関連付けて医師へ報告をする練習をしているということに驚きました。そういう訓練を早いうちから行うことで、現場でも早い段階で戦力になれると思うし、プロとしての意識づけにもなるのだと思います。また、数年ごとに免許の更新制度があり、すべての看護師が最新の医療知識を持って業務を行えるというのは非常に良い制度だと感じました。修士を取得する人も多く、看護師のプロ意識の高さに、自分も頑張らなければいけないと改めて考えさせられました。

様々な人種、国、宗教の人がいるアメリカならではの感じたのは、シミュレーション用の人形も皮膚の色が違ったり、病院には宗教関係の専門家がいたり、多言語対応の翻訳機があることでした。そのほかにも、体格が大きい人も多いので、大きいサイズのストレッチャーや車椅子が準備されていたり、移乗させる方法にも工夫がされていました。

また、マグネットホスピタルという認定制度は今回の研修で初めて耳にし、知ることができました。大学病院で勤務していた頃は国際基準の監査を受けるための取り組みなどにはありましたが、質の高い看護ケアを提供する病院である証となるマグネットホスピタルは、看護師の離職率に焦点を当てたところから始まったということで、患者ケアの質だけでなく、看護師の働きやすさについての指標にもなるということでした。アメリカでは分業化が進んでおり、特定の医療行為が行える看護助手のようなメディカルアシスタントという人たちがいたり、患者搬送係がいたり、日本とは違って看護師は看護業務に専念できるようになっており、質の高いケアを提供するためにはとても必要なことだと感じました。

今回、訪問したオレゴン州はアメリカで安楽死を1番最初に認めた州であるということで、安楽死についても学ぶことができました。安楽死が適応される条件や、実施されるまでの流れはもちろん、患者自身や家族の心理についても興味深いものでした。

その他にも、小児病院の見学や、チャイルドライフスペシャリストの方の話を聞いたり、AMRというアメリカ全土に展開している救急車の運用を行なっている民間企業で救命救急士の方からお話を聞かせていただき、自分とは違う診療科や分野の方々からお話を聞くことができ、とても新鮮で刺激的でした。

今回の研修は総勢25名、日本全国から様々な年代の看護師が集まり参加していたため、いろんな方とお話をすることができたのも良い経験となりました。現地ではお世話役の方々や通訳さんの存在は心強く、安心して5泊7日の日程を過ごすことができました。このような貴重な経験と有意義な時間を過ごさせていただき、ありがとうございました。